

エペソ人への手紙4章17-32節 「脱ぎ捨て、身につける」

1A 思いが新しくする 17-24

1B 異邦人の虚しい思い 17-19

2B キリストにある教え 20-24

2A 歩みを変える 25-32

1B 真実な言葉と行い 25-29

2B 聖霊による優しさ 30-32

本文

私たちは、交読文で読みましたように、エペソ人への手紙 4 章 17 節から学んでいきたいと思えます。今朝のメッセージの題は、「脱ぎ捨てて、身につける」です。私たちの交わりに、新しくイエス様を信じてバプテスマを受けられた兄弟姉妹が与えられたことは、本当に嬉しいことです。そして、新しい信者の学びも二週間前から始めましたが、その新しい歩みはコリント人第二 5 章 17 節に要約されていますね。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」このように、キリストにあって新しい歩みを始めました。

私たちは先月、エペソ 4 章の前半部分を読みました。召しにふさわしく歩みなさいという勧めによって、私たちがキリスト者として一致する、教会は神の御霊によって一致を保つのだということを学びました。そして、「歩みなさい」という勧めが続きます。歩みなさいというのは、「このような特徴で生活していきなさい」ということです。

1A 思いが新しくする 17-24

1B 異邦人の虚しい思い 17-19

4:17 そこで私は、主において言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。4:18 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。4:19 道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。

私たちが今朝学ぶのは、「異邦人のように歩まないこと」であります。異邦人のような歩みを捨てて、キリストにある新しい人を見に付けて歩むということです。異邦人というのは、自分がキリストを信じる前の歩み、神を知らない時の歩みであります。その歩みを捨てて、新しい歩みを身に付けなさいということです。ここでも、「異邦人がむなしい心で歩んでいるように」とあります。ここの「心」は正確には「思い」と訳したほうがよいところです。

私たちは、新しい信者の学びで「悔い改め」について学びました。悔い改めとは、「思いを変える」ことです。自分で生きてきたぞ、という自分中心の生き方から、それを捨てて、主ご自身に人生の印籠を明け渡すことであります。ですから、単に嘘をつかない、親切にするというような表面的に行いを改めることではありません。ですから、「異邦人が虚しい思いで歩んでいるように歩んではなりません」となります。

「異邦人」というのは、神を度外視して生きている人々のことです。天と地を造られた神を思いの中に抱きながら生きているのではない人々のことです。このような人々は、「虚しい心」あるいは、思いになっていると言います。神が自分を造られたことを知らないの、なぜ自分がこの世に生を受けたのか、なぜ今、生きているのか、死んだ後にどのようになるかを知りません。したがって、生きている目的を見失っている状態です。創世記 1 章 2 節に、神が光を造られる前は、「地は形がなく、なにもなかった」とありますが、まさに心と思いがそのようになっています。

そして、「その知性において暗くなり」と言っています。創造主を知らないの、見えるものが見えなくなっています。本人は知恵のある者だと思っていますが、万物の源である創造主を知らずして、どうして賢いと言えるのでしょうか？ 偶像を造る者について、預言者イザヤがこう言いました。「彼らは知りもせず、悟りもしない。彼らの目は固くふさがって見ることもできず、彼らの心もふさがって悟ることもできない。(44:18)」

そして、「彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、」とパウロは言っていますが、無知というのは教育を受けていないからそうなのではありません。神の知識について、それは明らかなのに心を頑なにしているの、無知になっています。そして、心を頑なにしていると、「神のいのちから遠く離れています。」とあります。神が人を造られた時に、土地の塵から造られただけでなく、ご自分の息を彼の鼻から吹き込まれました。それで生きたものとなりました。霊的な生き物となったのです。

神は霊です。神のかたちに造られた人も霊を持っています。植物は体しかありません。対して動物は肉体の他に意識があります。聖書は「魂」とも呼んでいます。けれども動物と人の違いは、霊を宿しているかどうかであります。自分の生きている意味、そして死んでからのこと、すなわち神について考えるように造られています。神の霊が人の霊と交わることによって、人はその思いと体を神に従わせることができます。ところがアダムが罪を犯しました。そして罪が神と人を引き離しました。生まれてきて、その霊は神から離れており、それゆえ神の命からも離れているのです。

そして神の命から離れているので、「道徳的に無感覚」となっています。感じるべき恥や罪が無感覚になっています。これが異邦人の歩みです。

2B キリストにある教え 20-24

4:20 しかし、あなたがたはキリストのことを、このようには学びませんでした。4:21 ただし、ほんとうにあなたがたがキリストに聞き、キリストにあって教えられているのならばです。まさしく真理はイエスにあるのですから。

ここが使徒パウロの強く教えたい点です。20 節、「キリストのことを」というのは「キリストを」であります。「あなたがたはキリストを、このようには学びませんでした。」キリストを知覚的に知ったのではなく、この方ご自身を知りました。個人的に、人格的に知りました。この関係において、イエスから学んだのです。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。(マタイ 11:29)」

そしてパウロは、「ただし」という言葉を付けています。そして「ほんとうに」あなたがたがキリストに聞き、教えられているのならばと条件を付けています。なぜなら、キリストについて聞いて信じたと言っても、その生活が変わっていないのであれば、ほんとうにキリストに聞き、教えられたのか疑わしいからです。キリストの言葉に聞き、教えられた人は、その信仰による応答には行いが伴っています。

そこで大事なものは、神の御言葉です。「まさしく真理はイエスにあるのですから。」神の真理である御言葉を聞くことによって、イエスご自身に私たちが会えることができます。神の言葉を聞かずして、この方から学ぶことはできません。この方を知るには聖書を読み、そして聖霊によってこの方から語りかけを受けるのです。そして得た信仰は本物です。

4:22 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、4:23 またあなたがたが心の霊において新しくされ、4:24 真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。

ここの箇所から、キリスト者はその性質が変えられたことを知ることができます。だれでもキリストのうちにある者は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去りました、見よ、すべてが新しくなりました、とあるとおり、罪によって支配されていた古い人は十字架と共に死にましたが、キリストにある新しい命が信じる者の内にあります。ですから、内側から性質が変えられたのです。単に思いを変えて自分の思考と行動形式を変える教育を受けているのではなく、すでに御霊によって新しく生まれており、自分がこの世から神に属する者となったという、居場所の変化によって私たちは自分の思いを変えることができるし、その行ないも変えることができます。

そしてこれからの歩みは、すでに与えられた新しい性質をそのまま実践することであり、そして、これまで当たり前のように行っていた古い行いをやめることでもあります。新しい結婚生活の時

に、これまでしていなかった新しいこともします。それはごちないでしょう。しかし、行なっていくと慣れていきます。むしろそれを行っていくことのほうが、今の自分の持ち場に相応しいことに気づきます。私は、新婚の時に独身の時のように動けなかったのが、初めは苦しかったです。独身の時の友達といっしょに土曜日は路傍伝道に行きましたが、妻との時間は土曜日にしか持てなかったのに、行ってしまったのです。けれども、少しずつ妻と時間を過ごして、今度は独身の集まりに出ていっても、あれだけ慕っていた集まりが自分には合わないと感じ始めるのです。これが、「新しい人を見に着ける」ことであり、「古い人を脱ぎ捨てる」ことであります。

ここで気をつけていただきたいのは、古い人を脱ぎ捨てるだけでなく、新しい人も見に着けることです。脱ぎ捨てるだけでは裸の状態です。新しい人を見に着けるために、古い人を脱ぎ捨てます。ですからこれは、同時に行なうのです。自分のこれまでの古い習慣をやめようと何度思っても、それが実行できなかった人も、キリスト者としての新しい習慣が楽しく、面白くなってきた時に、古い習慣に魅力を覚えなくなっていくます。ちょっと心理学的なのですが、白い象を頭に思い浮かべてください、とお願いします。それからその象を思いから消してくださいと言います。白い象を消すことができた人は、それを消すために例えば、紫色の象を思い浮かべればよいのです。

そして古い人についてですが、「人を欺く情欲によって滅びて行く」とありますね。ここの情欲は、必ずしも性欲に限りません。神の与えておられる垣根を越えて、肉体の欲求を満たすことを聖書では情欲と言います。そして情欲は、人を欺きます。自分はこれをやっけて大丈夫だと欺き、それでその人を滅びへと向かわしめます。けれども、新しい人については、「真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された」とあります。神の真理、すなわち神の御言葉です。御言葉によって、神の義と聖さを知ります。そして神の義と聖さが自分の内に形造られます。自分のうちに、神のかたちが回復していくのです。

そして、古い人を脱ぎ捨て、新しい人を見に着けるのに、「心の霊において新しくされ」とあります。思いの霊と言っていいでしょう。先ほどから話している、新しく御霊によって生まれることによって、思いも変えられるということです。私たちキリスト者は、このように新しい御霊の性質に基づいて、思いを新たにしていくという作業を絶えず行っている生き物です。これは、聖書の学びという知的な作業だけではなく、賛美と礼拝によっても変えられます。祈りによっても変えられます。聖餐にあずかることによっても変えられます。そして、交わりによっても変えられます。

2A 歩みを変える 25-32

これらが、主に思いの中で起こっていることですが、次にこの作業を具体的な行ないによって、歩みによって適用させていきます。

1B 真実な言葉と行い 25-29

4:25 ですから、あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。私たちはからだの一部分として互いにそれぞれのものだからです。

一つ目は、偽りについてです。これを捨てて、真実を語ります。モーセの十戒に、「偽りの証言を立ててはならない」という戒めがあります。けれども、新しいキリストの律法の中では、自分自身のように隣人を愛しなさいという命令があります。隣人を愛するなら、嘘をつかないはずで

ここで大事なのは、「偽り」を捨てるだけではないことです。嘘を付かないだけでなく、積極的に真実を語っていくのです。先ほどの「古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を見に着ける」行為であります。真実を語ることに集中するならば、自ずと嘘を言っている習慣も捨てることができます。

私たちはしばしば、いかに自分を守るために言葉を選んでいくかということを考えます。これが、「世渡り上手」で、世間では嘘を付くのも方便であります。けれども、キリスト者であっても言葉上は嘘はついていないのかもしれませんが、上手に言わないことによって自分を他者に隠していくことをします。そうではありません、愛の結びつきの中で自分の弱さ、時には自分の罪さえ告白するような、受け入れと憐れみの御霊が私たちの間に留まっておられるなら、それだけ真実を語るができるのです。「あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。(ヤコブ 5:16)」

4:26 怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。4:27 悪魔に機会を与えないようにしなさい。

「怒る」ことについてですが、怒ることと「罪を犯す」ことを区別しています。怒りそのものは、罪ではないからです。神ご自身が怒りを持っておられました。イエス様も、神の宮で商売をしている姿をご覧になって、怒られました。私たちは悪に対して怒らなければ、それはおかしいです。しかし、私たちの怒りは、神の義を達成することはないとヤコブ書 1 章に書いてあります。怒っているうちに、私たちは神ではなく自分自身の義に拠り頼むようになってしまうからです。神だからこそ、正しく公平で、そしてすべての事を知っておられるからこそ怒ることができて、私たちはその全てを知ることができません。ですから、怒りは神に任せるのです。

そして興味深いことに、「日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。」とあります。ユダヤ人は日没を一日の始まりとしていますが、一日を越して憤ったままにしてはいけないと言います。それはなぜか？ 次の「悪魔に機会を与えないようにしなさい」という言葉につながりますが、その憤りが苦みへと変えられ、悪魔がその苦みを弄ぶ機会を作ってしまうからです。「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がいないように、また、苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように、(ヘブル 12:15)」

サタンは、私たちに巧妙に罠をしかけてきます。「これは、私たちがサタンに欺かれないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。(2コリント 2:11)」サタンには策略がありません。そして、私たちを喰い尽くそうと獅子のようにうろついているとペテロ第一5章にはあります。ですから、私たちは絶えず、サタンの策略はどこにあるかを見分けなければいけません。兄弟で意見が異なって議論したときに、そこで自分の主張が通ることが益になるのか、それとも一致することが益になるのか考えます。その中でいつのまにか、互いの間にねたみや敵対心が出てきたら、それはサタンのおびき寄せなのだと思って、へりくだって神に祈る必要があるのです。

4:28 盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをするため、自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。

盗みについてです。ここでも、古い人を捨てて、新しい人を見に着けます。盗みをキリスト者がするのだろうか？と思われるかもしれませんが、ここがエペソの町であることを思い出してください。不品行は当たり前、盗みも上手に行っていたのでしょ。キリストに聞き、教えられていけば、これらのことを行なわないはずだ、とパウロは言っているわけです。嘘は捨てることを彼はキリストの教えとして教えました。

そして、新しい人は「ほねおって働きなさい」というものです。興味深いですね、ただ盗みをやめるだけでなく、人に施すのです。自分が盗るのをやめるだけでなく、他の人に施します。しかもその施しは、自分の財産の余剰から出すのではなく、むしろ骨折って働いてそれで施しをするのです。ここまで変えられた生活を送ることができるのか？とってしまうかもしれませんが、これがキリストにあって新しい性質をいただいた私たちはできるのです。

4:29 悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。

悪口についてですが、人についての悪口がいかに害毒であるか聖書は数多く語っています。「彼らの口には真実がなく、その心には破滅があるのです。彼らののどは、開いた墓で、彼らはその舌でへつらいを言うのです。(詩篇 5:9)」そして、ヤコブも警鐘を鳴らしました。「舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、からだ全体を汚し、人生の車輪を焼き、そしてゲヘナの火によって焼かれます。(ヤコブ 3:6)」神を知らないこの世においては、悪い言葉が当たり前とされていました。陰口をいうことも当たり前でした。しかし、それは古い人です。捨てなければいけません。

そして黙っていればよい、ということではありません。むしろ、「必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与え」ます。言葉は人を倒す道具ともなりますが、反対に人を立

たせる力ともなります。励ましと勧め、慰めの言葉は人を立たせることができます。そして、聞く人は恵みを受けます。主はそのような者たちを宝だと言ってくださっています。「そのとき、主を恐れる者たちが、互いに語り合った。主は耳を傾けて、これを聞かれた。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で、記憶の書がしるされた。「彼らは、わたしのものとなる。・・万軍の主は仰せられる。・・わたしが事を行なう日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。(マラキ 3:16-17)」ですから、聖霊の働きを学ぶ必要があります。言葉による賜物が聖霊によって与えられます。知恵の言葉、知識の言葉、預言の言葉があります。

2B 聖霊による優しさ 30-32

4:30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。4:31 無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。4:32 お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。

パウロは異邦人のように歩んではいけないという勧めの中で、ここの無慈悲、あるいは苦みについての警告を鳴らしています。(無慈悲と訳されていますが、苦みのことです。)憎悪、憤り、恨み、こうしたものが異邦人の者たちの間では共有されていますが、それらはいっさいの悪意を共に捨てなければいけません。これらは、神がキリストにあって私たちのために行なってくださったこととあまりにも相容れないものです。

「神の聖霊を悲しませてはいけません。」とあります。聖霊は人格を持っておられる方です。エネルギーではありません。感情を持っておられ、悲しませることができます。神の霊の導きに反することを行なうと、聖霊は悲しまれるのです。そして、「贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」とありますが、これは一章でパウロが聖霊の働きについて説明した部分です。神の贖いが後に来ます。主が戻って来られる時に、私たちの体は栄光に体に変えられます。体も贖われるのです。けれども、その日までは聖霊が私たちの証印となったださり、私たちが確かに神の所有の民になっていることを示してください。そのような働きの中で、聖霊の実である愛を結ぶのです。

けれども、聖霊を悲しませるものがここにある、「無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしり」です。これらもこの世には、はびこっています。今は終わりの日です。人々に怒りと憎悪が積み上がっています。しかし、キリスト者はこれとは無縁の存在でなければいけません。そして新しい人を身に着けるのですが、「お互いに親切にし、心の優しい人」となるのです。愛は忍耐強く、親切であるとパウロは言いました。忍耐して、その結果、親切という態度に変わります。それから心が優しいのは、柔らかいと言い換えると良いでしょう。相手が主張してきても、自分がやり返さないことです。

そして、その土台は、「神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」であります。私たちは、罪を犯す者というのが前提になっている関係です。互いに過ちを犯します。けれども、ゆえに私たちはキリストにある神の赦しの中に生きる献身をするのです。「神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださった」という恵みが大切です。神との恵みの交わりこそが、私たちが他者に大らかになれる源です。

マタイ 18 章 23 節以降に、借金をしている僕の姿が出てきます。一万タラントの借金をしています。一タラントが六千デナリで、デナリは一日の労賃に相当します。かりに一日一万円の労賃だとします。一タラントで六千万円であり、一万タラントですから一兆円です。つまり、これはそれだけの罪を犯したのだということです。神に返済できるような罪ではないということです。それで王は帳消しにしてくれました。ところが、しもべに借りのある他のしもべは、百デナリでした。ところが彼はそれを赦さず、なんと牢に投げ入れました。それで王は怒り、彼を全額返済するまで牢屋に入れたのです。

ぜひ、神の恵みにすがってください。神はとてつもない借金の返済をされたのです。まで自分の手元に借金が残っている等と思わないでください。そして、その罪は到底返済できない、大金であったことを忘れないでください。これがあるから、他の人が自分に罪を犯した時に、自分はへりくだることができます。憐れむ心を持つことができるのです。

これが新しい人、神の義と聖に形づくられた新しい人の歩みです。